

においては人間が主体的な役割を演じているのである。

これに対して、分析論における人間の位置づけはやや異なっている。分析論においてカントは神と人間のそれぞれが道徳法則とどのような関係を持つのかを論じている。感性的であるがゆえに有限であり、主観的な願望を持つことで道徳法則に反しうる人間にとって、道徳法則は強制として命法という形式で現れる。これに対して、無限的存在者である神にとっては道徳法則は命法とはならない。なぜなら、神は道徳法則のみをすでに必然的に意志しており、すでに欲している事柄を強制されることはできないからである。このように、分析論においてカントは道徳法則との関係において人間と神を偏りなく扱う。そしてその場合、道徳の主体は理性的存在者一般であり、人間は理性的存在者の一ケースにすぎないのである。

このように、分析論と弁証論の間には議論の展開における人間の位置づけ・役割に関して大きな差異がある。分析論において人間は理性的存在者の一ケースにとどまり、道徳の主体は理性的存在者全般であった。しかし、弁証論において最高善を欲する主体はただ人間のみであり、人間のみ視点から議論が展開されるのである。すなわち、最高善の議論は考察の対象を人間に限定することによって始まるのである。弁証論における幸福の主題化とは理性的有限的存在者としての人間の主題化に他ならないのである。

本発表ではカントにおける幸福の主題化を人間の主題化として論じたに過ぎないが、この最高善を通して魂の不死・神の現存在が要請され、カントの宗教哲学が具体的な形をとり始める

ため、最高善を欲するということを意味する。それゆえ、カントの宗教哲学の方法を明らかにするためにも、最高善における幸福の主題化の根拠の明確化は重要な意義を持つと思われる。

フィヒテ宗教論の展開とシェリング

諸岡道比古

感性界と超感性界とを、カントは『判断力批判』において合目的性という概念において統一しようと試みた。しかしフィヒテもシェリングも、一つの原理からその統一を導出できていない、とカントを批判する。例えば、理論哲学と実践哲学を結びつけるものである全哲学の基礎を論じていない、とフィヒテは『全知識学への第二序論』で述べ、シェリングは『全知識学の基礎』に刺激を受けて書き上げた『哲学原理としての自我について』において、批判哲学の諸成果を一切の知の究極的原理に還元して叙述する、としている。フィヒテもシェリングもともに同じ意図から自らの哲学を形成し始め、ともに絶対的的自我によってその統一を図ろうとする。

両者の始まりは絶対的的自我であったが、次第にその内容の齟齬が出てくる。シェリングは『近世哲学史』において、フィヒテは絶対的自我を「人間的な自我としてのみ把握している」とし、また『啓示の哲学』において、フィヒテが彼の通俗哲学書『浄福な生への指教』などで唯一実在的なものである絶対者を、

かつて唯一の実体とした絶対的自我と結合している、と批判する。フイヒテは最初シェリングを彼の解釈者と見ていたが、シェリングは初めから、特に『私の哲学体系の叙述』以降、絶対的自我を自我と非我、自由と自然との根底にある両者の無差別な同一性としての絶対者と考えており、フイヒテとシェリング両者には、ある意味最初から、絶対的自我に関して齟齬が生じていたのである。

ところで、フイヒテは絶対者を通俗哲学書において初めて導入したのであろうか。カントの宗教論と誤解された『あらゆる啓示批判の試み』は、カントと同様に、絶対者を最高善実現のために要請している。また無神論論争期のフイヒテは「神の世界支配への私たちの信仰の根拠について」など一連の論文で、神への信仰を人間の内に前提した上で、人間が神の世界支配を信じている、ということを経験的存在者の必然的な振る舞いから事実として導出する。つまり道徳的心術に基づいて神に対する信仰が存在することになり、『あらゆる啓示批判の試み』における神とある意味同じ神が論じられているが、信仰の内在を前提する点に違いはある。この点は知識学講義や通俗哲学書等で次第に明白となる。

フイヒテは神について最初から論じていたが、彼が精力を注いだ知識学講義等は公刊されることなく、通俗哲学書のみが出版されたため、同書で絶対者が論じられた、とシェリングには受け取られた。例えば、『一八〇四年知識学第二回講義』においても先のカント批判に基づき、フイヒテは存在と思惟との関係から、「両者の絶対的統一と不可分性の原理のうちに」絶対

者を求め、そして最高の事実的明証として絶対者を定立する。次にその原理から逆に両世界の現象を發生的に証明するとともに、絶対者と絶対的自我との関係も明らかにする。『浄福なる生への指教』においては人間の生を「真実の生」と「仮象の生」とに分け、絶対者と人間との関係を五つの立場から説明する。絶対者のもとで自我を論じるが、ここに人間の自我がどこまで絶対者と一致するか、という問題が生じる。

以上のように、シェリングのフイヒテ批判は、両者が独自の哲学を展開したということとを考慮すれば、フイヒテの絶対的自我がシェリングのそれとは相違し、人間的自我であることは当然のことである。また、通俗哲学書で絶対者が現れた、という批判は、フイヒテとシェリングとの間が疎遠となったこと、知識学講義等が公刊されなかったことが原因であり、フイヒテがそれ以前にも絶対者について論じており、一面的な批判である。しかしフイヒテが絶対者との関係で自我を論じる際、絶対的自我と絶対者とがどこまで相即するか、という問題が出てきたことは、シェリングの批判の通りである。

神性と人間

——フリードリヒ・シラーの遊戯衝動について——

田口 博子

「人間はその言葉の十全な意味において人間である場合のみ、遊ぶことができるのです。そして、遊んでいるときにこそ、全